

環境について
みなさんもう一度真剣に考えてみませんか？

Save The Kikuchi River



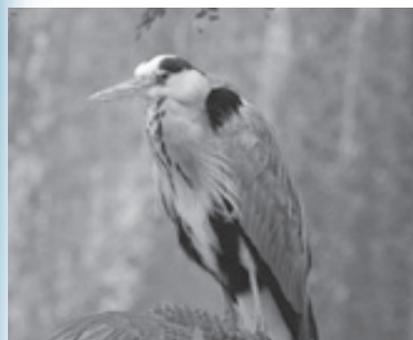
10年ほど前になると思いますが、私の家の屋根の上を大きな鳥が前の小川の方へ飛んで行ったのを見てびっくりしたことがあります。今まで見たことがないような巨大な鳥でした。調べてみたら「アオサギ」というサギの一種で、サギの仲間では一番大きいサギであることが分かりました。以前は熊本県内ではあまり見かけない鳥でしたが、平成4年に県内では初めて緑川の河口のコロニーで繁殖が確認されています。サギ類は本県には沢山います。ダイサギ、チュウサギ、コサギ、それにゴイサギ、アマサギなどです。

アオサギはゴウノトリ目サギ科アオサギ属に属し、サギ類では最大です。体の上面は灰青色、下面は白く、口ばしと脚は黄褐色、時々わがれた声で鳴きながら飛ぶことがあります。口ばしは長く鋭く尖り、脚は長く第3第4の指間には浅い水かきがあります。ゆつくり歩きながらカエル、貝、カニ、ネズミ、昆虫など動物質を捕食します。ヨーロッパ、アフリカ、オーストラリアに広く分布し、多くは留鳥ですが一部は冬南方へ渡ります。日本のアオサギは沖縄や台湾に渡ります。繁殖期は

6〜7月で海浜や湿地帯の近くの大木の高い所に枯枝を集めて粗雑な巣を作ります。青緑色の卵を4個ほど産んで25〜28日でかえります。ツルと似ていますが、ツルのほうが大きく飛翔中は顎(アゴ)をS字状に曲げているのでツルと間違えることはありません。

△終わりに▽和水町水援隊のメンバーとして10数年間「水援隊だより」として菊池川の魚類について書いてきましたが、今年の6月で水援隊としての任期が終わりますので、この記事で終わりにしたいと思います。川の生物については全くの素人の浅はかな知識でもって臆面もなく思いつくまま書いてきましたが、間違いや見当はずれも沢山あったかと思いますが、和水町の方々が昔から親しく接してこられた生き物ばかりだと思えますので、お気付きの点がありましたら是非ご指摘くださいますようお願いいたします。

私達は子供の頃の夏の遊び場はほとんど川でした。菊池川とその支流です。夏休みなどは毎日川へ行ってました。先輩や親達から川や魚の捕り方について色んな事を習いました。そ



アオサギ



水援隊メンバー6名と関係者
(荒瀬ダム撤去作業見学)

んな川の姿がいつの頃からかなくなってしまい、今の子供たちは可愛そうです。田舎の原風景は少なくなってしまうが、少しでも元の風情を残すように努力していかなければならないと思います。

歴史調査の楽しみ方

江栗城跡 9

I 郭(37)の手前で、石切り場跡の南端を確認しました。それまで、跡地の西下、びったりと並走してきた県道がI郭から離れていく所です。

I郭の南端区画 (37)は、最大幅6m、全長27mのブーメラン型をした平場です。造成の度合いが高く、地表面は、真つ平らです。肩部には、これまで通り、切り立った凝灰岩(高低差7m)が、むき出しになっています。採石作業で生じる石屑の堆積は皆無で、岩肌は、自然のままの状態を保っています。

平場の東端は、段上がりになって、犬走り(39)に繋がっています。このこと、(37)は、その延長部分と考えられます。それにして、絶壁の岩場下を、よくも、この様に手を加えたものです。

西縁下の石切り場跡

(37)の様子を把握した上で、石切り場跡を詳しく見直すと、似たような地形が、一部に残っていました。その結果、採石以前の岩場下には、規模の大きな犬走りが存在したであろうとの推論に至りました。

石切り場の成立

これまでの推論通り、I郭の北西縁と西縁には、帯状に連なる凝灰岩の露呈ライン

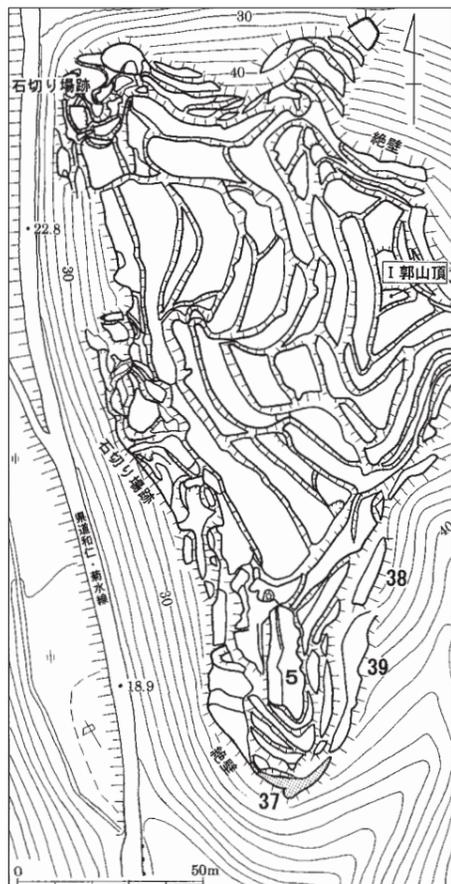
がありました。これに業者さんが目を付けました。岩場下の犬走りや西下の犬走り、県道の存在も魅力でした。前者は、作業足場として、後者は、採石を運び出す手段として、この上ない好条件でした。この事を裏付けるように、県道がI郭から離れる(37)で、石切り場が終わっています。

縄張りでの位置づけ

帯状の凝灰岩絶壁ラインは、この上ない天然の要害になります。自然が造った石の城壁です。崩壊の危険もありません。ところが、江栗城跡では、さらに、この岩場の下に犬走りを設けて、鉄壁な守りに仕上げているのです。築城者は、現在、県道が通じている西下迫地からの攻撃を何としても、防ぎたかったのです。

I郭南東縁下

斜面部に、大小10段の帯状地形が連続しています(下位の2段は、未調査です)。この中で、6段目の(38)は、形が整っており、幅4m長さ19m、最上段の(5)と5mの高低差があります。7段目の(39)は、大型の造成地(調査途中)で、実測分の長さ40m、幅は、2〜7m、(38)と10mの高低差があります。一方で、帯状地形の10段目から下位は、急傾斜で、そのまま谷底に下ついています。谷の南



I郭西側遺構図



37地点 西→東



石切り場

大田 幸博

(元・菊池町史編集委員会副委員長)